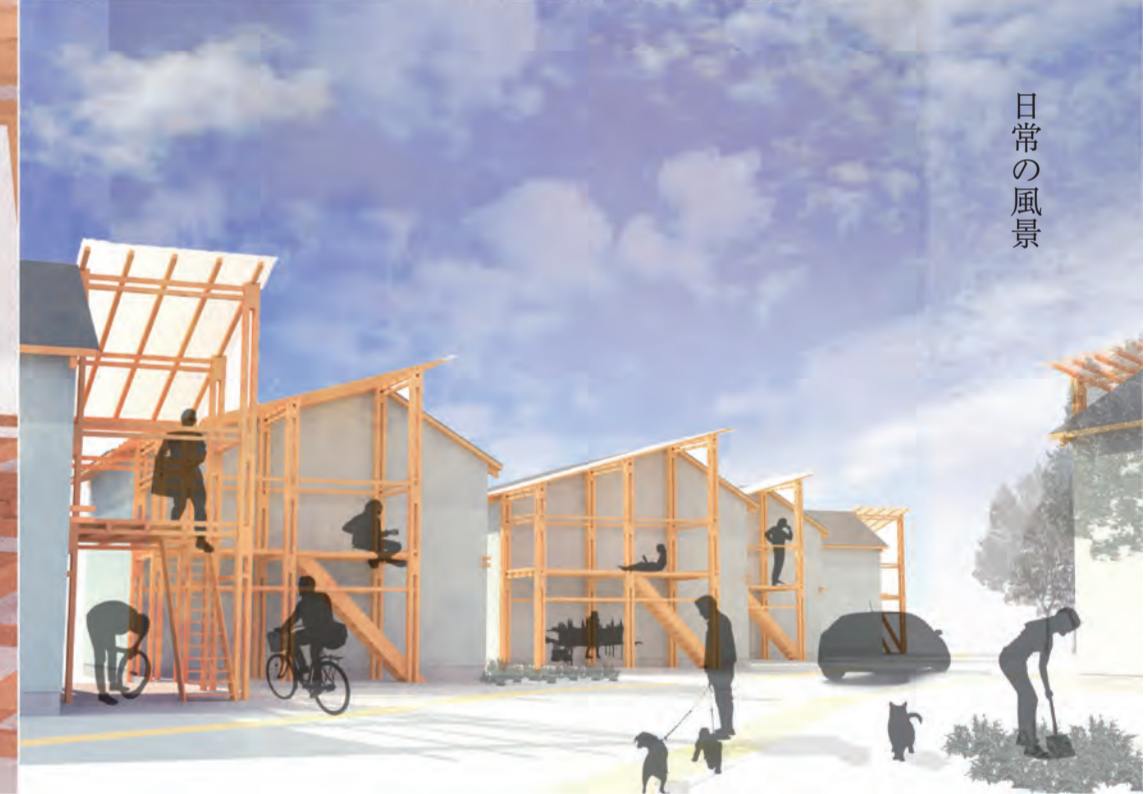


# 滑稽なまちづくり

餅まきから始まる近所付き合い



## 01. はじめに

現在の世の中

都市・地方に関わらず近所付き合いの頻度や程度が低下している。



問題提起

土地の開発、住宅の建設時に近所付き合いのことを考えた作り方がされにくい。



提案

建設過程の建築儀礼を見直す。

「餅まき」は建設過程より地域住民と関わる機会をもち、

「餅まき」をきっかけとしたまちづくりで近隣住民の結びつきが強まると考えた。

## 02. 建設過程の餅まき

山口県内の工務店および施工会社にアンケート調査を行い、「餅まき」が建設過程においてどのような現状にあるのか確認した。

餅まきを開催することで得られる効果として、以下のものが挙げられた。

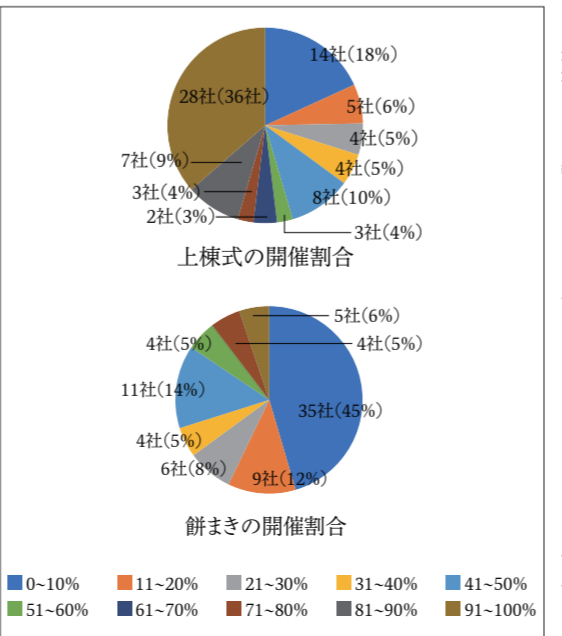
- I 建設過程から建設中や建設以降にまで及ぶ関係性の変化が起こる。
- II 近隣住民が工事に興味関心を持ち、声かけや挨拶が増え、クレームなどが減る。
- III 工事現場に一時的に多くの人が集まり、盛り上がりを見せる。



上棟式と同時に行われることの多い餅まきだが、上棟式の開催は多いにもかかわらず開催割合がとて低。施主の意向がとて大きく関わっているためだと考えられる。



餅まきの供給方法を見直す必要がある。



## 03. 対象敷地

敷地は山口県宇部市に位置する一般的な住宅地を対象とした。かつては周辺田畑のための溜池として共同管理がなされていたが、田畑の消滅とともに水嵩が減り、埋め立てを経て住宅地へと計画された。周辺に学校施設が多いことから、幅広い世代の交流が望める敷地である。



## 04. 現地調査

敷地は周辺に対して閉じ、近所付き合いは想定されているとは考えにくい。





**餅まき**  
餅まきをきっかけに、この場所や建物に興味を持つ

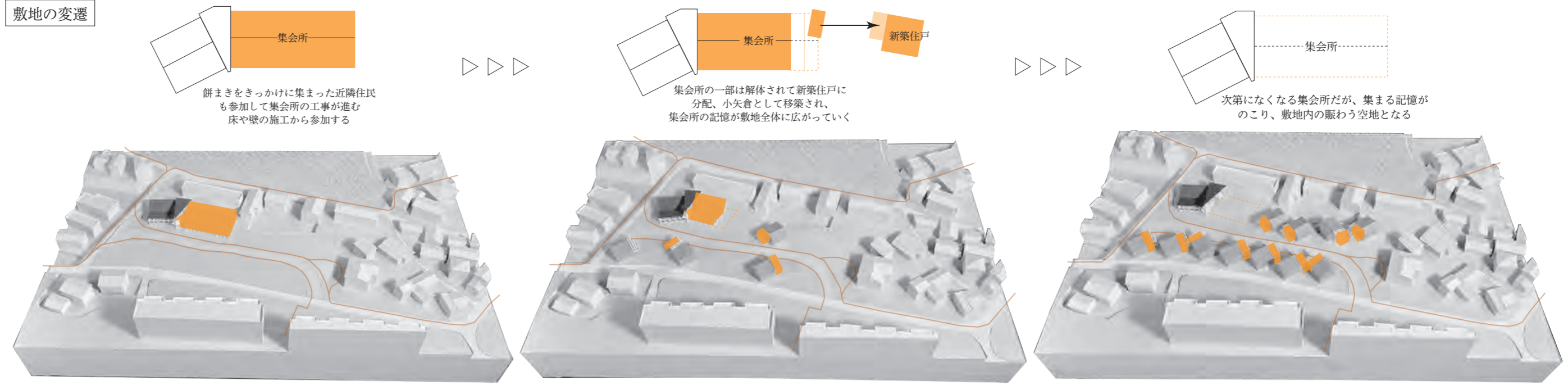
**建設**  
興味を持った人々は、床などの簡単な施工を手伝い、建物や集まる場所を自分で作っていく

**解体**  
自分達も作った場所を新しくそこに住む住人に分ける建設に携わっており、新しい住人と施工を通じて仲良くなる

**再構築**  
集会所は主人の趣味や居場所がまちに広がる小矢倉となるかつて集会所だった場所には集まる記憶が残っており、自然と人が憩う空地になる

これらが繰り返され、街が次第に形成されていく

敷地の変遷

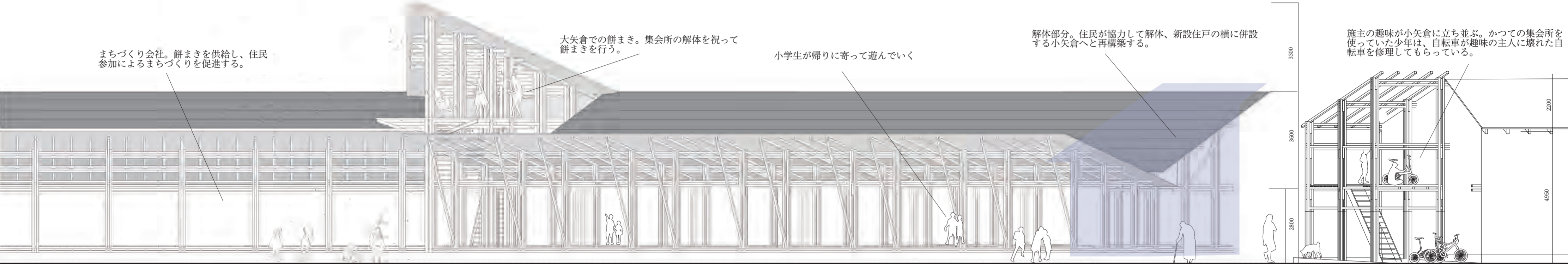


大矢倉：集会所に隣接し、対象地全体で餅まきを行うときはここから餅をまく。

地域全体の餅まき台（一時的利用）→地域のランドマーク及び展望台（通常利用）

小矢倉：新築住宅に隣接し、住宅の新設後にここから餅をまく

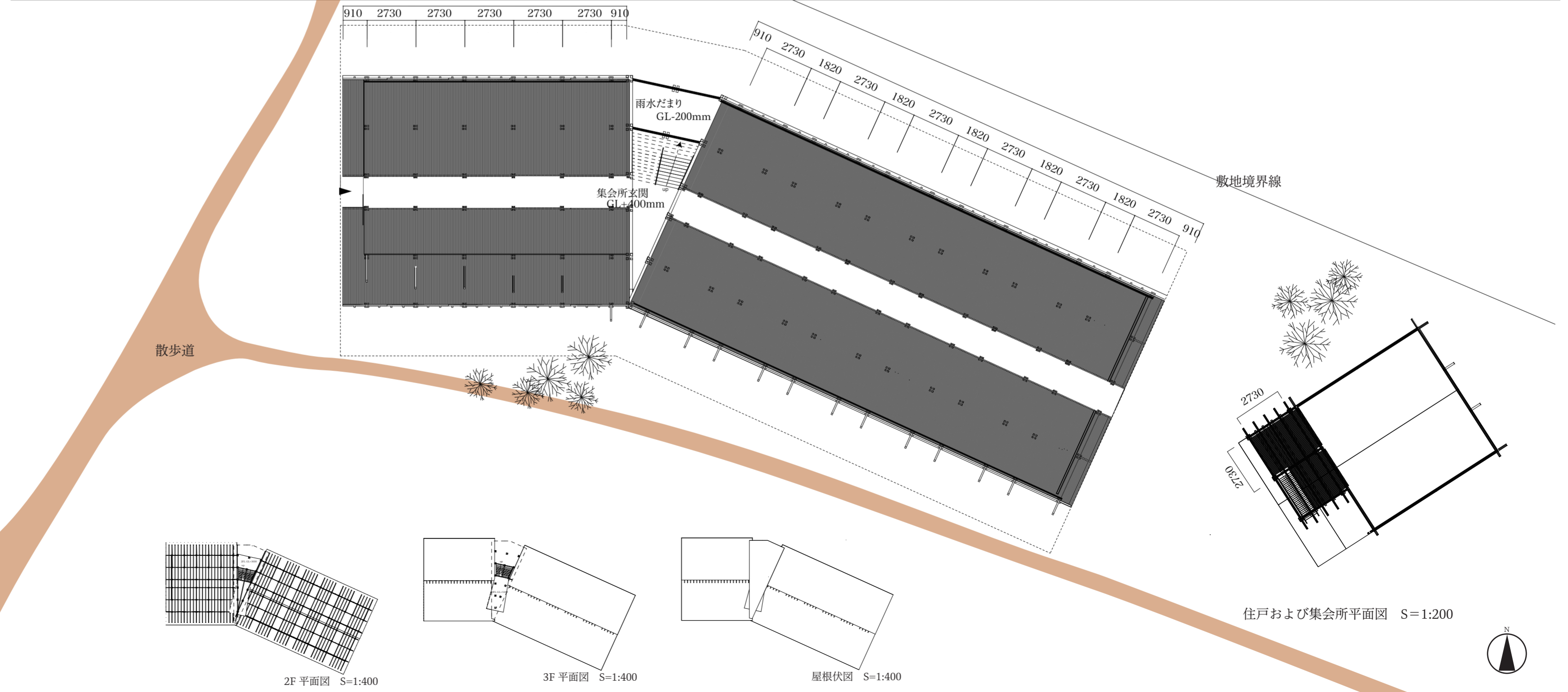
新築住宅の餅まき台（一時的利用）→住宅の主人の趣味が展開される場（通常利用）



07. 配置計画



09. 平面図



08. 詳細計画

素人にも構造体に区別が付き、仕口が単純化する工法を考える。これらの材は集会所から小矢倉へと住民自らの手で組み替えられ、再構築されていく。

